

# 町内会は震災にこう対応した！

泉区では、東日本大震災に際しての町内会の被災者支援活動の記録・保存を図るとともに、今後の災害時の支援活動などに役立てるため、地域の皆さまにご協力いただきインタビューを実施しました。このリーフレットはそのエッセンス部分をまとめたものです。











大規模避難所から集会所まで様々なケースについて、避難所運営や在宅避難者支援、日頃の活動の成果と震

災後の取り組みなどについて紹介しております。今後の地域における防災活動やコミュニティづくりの参考としていただければ幸いです。

ご協力いただいた町内会の皆さまに心から感謝申し上げます。

※文章中の役職は震災発生当時のものです。

## 目次

	泉ビレジ館連合町内会 祭り、ふれ合いが育んだ 避難所運営	……1P
	市名坂東町内会 “防災” 集会所 が避難所として活躍	……2P
	加茂連合町内会 避難所運営マニュアルが間に合った	……3P
	黒松連合町内会 帰宅困難者ら数千人が殺到！	……4P
	向陽台連合町内会 地域の人材とネットワークで避難所運営	……5P
	松陵・永和台百合が丘連合町内会 加美町の営農組合との広域災害支援協定が生まれた	……6P
	高森東連合町内会 共助が当たり前になる地域社会を目指して	……7P
	長命ヶ丘連合町内会 6月に大反省会を実施	……8P
	南光台第六町内会 小学校が被災！コミュニティ・センターを避難所に	……9P
	友愛町自治会 小規模だからこそできた見回り・小まわり・気配りが	……10P

## 祭り、ふれ合いが育んだ

### 避難所運営

泉ビレッジ館連合町内会 会長 小金澤 佳史さん

泉ビレッジは仙台市の北西部、青葉区との境にある丘陵地帯の高台に開かれた独立した団地で、中心部に小・中学校とコミュニティ・センター、館中央公園、東北高校泉校舎がある。7町内会で構成する連合町内会である。

### 炊飯ボランティアを募集

1200食の炊き出し、水汲み、避難者誘導など、ボランティア無しでの運営は不可能であった。中学生が30人、高校生は60人、他に住民の方々。備蓄米が底をついた時には、住民に一合の米の提供をお願いし、一部地域で電気が復旧した14日には米を渡し、自宅でご飯を炊き持参するように呼びかけた。燃料が枯渇する中、何十人も手を挙げてくれたお陰で6回の炊き出しができた。

日頃から学校、町内会行事を含めて子ども達とふれ合い、一緒に活動する機会が多いことが、子ども達のボランティアマインドを醸成しているかもしれない、と会長は考えている。

### 中学生も参加する防災訓練

防災訓練は前年から町内会単位で開催し、よりきめ細かい対策を模索している。

連合町内会は安否確認を主眼にする。中学生が高齢者宅を巡回し、小学生や高齢者を集会所へ、更に集会所に集まった高齢者を指定避難所へと誘導する訓練である。なお、祭りでは防災倉庫の機材を使用して炊き出しをしており、今回もその経験が生かされた。



▲小金澤佳史さん



▲本部会議の様子

### 学校との交流が生きた運営

地震直後、役員との連絡がとれずコミュニティ・センターに集まったのは会長、副会長の2人だけだった。館中学校、次いで館小学校へ行き避難所開設を決定。

連合町内会が中学校を運営し、全体の対策本部とした。メンバーは小・中学校の校長、民生委員を含め15人。小学校は、教職員が主導して運営。集会所は2ヶ所を開放し副会長達が運営にあたった。備蓄倉庫から資機材、食糧を持ち出し、集会所を含めた各避難所へ移送。混乱の中ではまずまずの初動だった。避難者は中学校が140人、小学校が270人。2日目には各避難者から聞き取りを行い、帰宅可能者が相当数いる事を把握し、集会所を閉鎖、13日に

は中学校への統合を実行した。最終の炊き出しは21日で、23日に避難所を撤収した。様々な行事で町内会と学校との交流が多く、顔見知りになっていたことが避難所の開設、運営が円滑に進められた理由と考えている。

### 防災マニュアルから行動マニュアルへ

連合町内会では平成22年5月に「館：我が家の防災マニュアル」(A5版・カラー・24ページ)を作成、全戸配付を行っていた。このマニュアルもある程度役だったが、震災後アンケートを実施、5月には一回目の防災検討会を開催した。指摘された問題点等をふまえ、より実践的な行動マニュアルを作成中である。



▲高校生ボランティアによる給水



▲照明をつけての炊き出し



▶学校入口に  
掲示板を設置し広報

## “防災”集会所が

### 避難所として活躍

市名坂東町内会 会長 草 貴子さん

市名坂東町内会は、泉区東部、運転免許センター近くにある、平成20年に出来たばかりの町内会である。勤労世帯が多く、役員が全員女性であることが特徴となっている。一帯は集合住宅と戸建てが混在し、近くには商業施設が集まっている。

### ■オール電化・ロフト付き倉庫の集会所

地区の指定避難所は市名坂小学校だが、町内から2キロと距離があることから、平成22年に完成した集会所は、最初から緊急時の避難場所として防災を強く意識し、工夫を凝らした。ライフラインの復旧は電気が早いという想定からオール電化とし、勝手口からも出入りできる広々としたロフト付きの倉庫、71坪のフロアリングのワンルームと対面キッチンとした。また、女性が中心という点を考慮し、備品倉庫の造り付けの収納の高さを女性に合わせて、テントに加え、女性でも設置が容易なタープテントも準備するといった工夫をしている。

震災当日は、ここに女性と子ども約100人が避難、備蓄していたアルファ米と飲料水を提供した。

翌日、会長は集会所に備えていた折り畳みヤカーで指定避難所へ支援物資の引き取りに行っているが、支援を受けたのは、12、13日の2日間だけで、その後は各家庭からの持ち寄りなどでまかされた。

▼オール電化の市名坂東集会所  
▲草貴子さん



### ■避難所での暖かい交流

町内会役員は自宅を過ごしており、避難者は町内会未加入のマンションの住民が大半だったため、避難者の中からリーダーを決め、町内会がサポートする形をとった。顔見知りでない同士ということ、毎日午前と午後にはコーヒータムを設けて交流を図った。

地域では、電気は2〜3日、水道は3〜4日で復旧したので、その後は各自が持ち寄った材料で子どもたちが調理するなど、ほのぼのとした時間も取れるようになった。

また、子どもたちは集会所に集まった生活情報を町内に広報するのに活躍した。学校も休みになっていたので、避難者の大学生と高校生の

二人が「何か出来ることを」ということで、「子どもが「何か出来ることを」ということで、「子屋」という形で子どもたちの勉強の面倒を見た。

避難所は3月20日に閉鎖したが、最終日には「帰りたい」と言っていて泣く子どももいたほどだ。

### ■防災の備えはまず自宅から

普段の町内会活動においても、活動できるのは主婦だけで高齢者も少ないという実情から、子ども会以外の組織はあえて作らず、行事も防災訓練と同時にこなす程度にとどめている。なお、昨年の祭りの収益金3万円は、あしなが育英会を通じて津波被災児に寄付した。

日頃から町内会便りで、繰り返し家庭での備えを呼びかけており、震災後には防災アンケートを実施した。

チリ地震津波や8・6水害、宮城県沖地震も経験した草会長は、「防災は、親戚とかじゃなくて隣近所」と感じている。まずは各家庭で防災の備えを進めること、そして地域のコミュニケーションを図ることが必要と考えており、今後「できる範囲で」取り組んでいきたいと考えている。



## 避難所運営マニュアルが

間に合った

加茂連合町内会 会長 阿部 晃さん



▶ 阿部晃さん

## ■自分たちの身は自分たちで守れ!

加茂連合町内会は水の森公園の北側に位置する丘陵地帯にあり、北環状線を南北に挟んで、9町内会で構成される。地区内に桜の名所、長命館公園が、近くには町名の由来となっている賀茂神社がある。

加茂防災協議会は連合町内会とは半ば独立した組織で、その会長が専任であることが大きな特徴である。平時は防災訓練を主導する。防災協議会の指導の基本は「自分達の身は自分達で守れ」で、防災訓練は連合町内会の訓練の他に町内会毎の自主防災訓練を実施している。ちなみに連合の訓練は十数年も続いており、参加者は毎年300人を越える。災害時には避難所運営に関わり、名簿・衛生、物資、救護等の活動班を率いる。

震災直前に完成した避難所運営マニュアル



▶ 避難所運営マニュアル

ル(A4判・32ページ)の作成も主役は協議会で、マニュアル作成会議には小・中学校長をはじめ各種地域団体の責任者も参加して独自に作成したものである。

## ■マニュアルによりスムーズな運営

マニュアルは2月に市の消防局と泉区の職員も含めた会議で承認され、主要メンバーに配付。新年度になったら全戸への配布を、と準備していた矢先の地震であった。全戸配付は間に合わなかったがそれでも成果はあった。①避難所の運営は学校の協力を得ながら町内会と防災協議会があたる事について関係者が共通認識を持っていた事②避難者による活動班を編成できた事③避難所の運営ルールなどである。ルールは、起床・ラジオ体操・清掃・夕食・就寝のそれぞれの時間、ゴミの分別やトイレの使用法など多岐にわたり、これらのルールは体育館の壁に掲示した。

なお、避難所運営の実体験を踏まえてマニュアルの修正を行っている。

## ■避難所閉鎖後も要支援者へ食糧支援

小・中学校や当初、単位町内会中心に運営した集会所の避難所は16日までに、運営委員会を設置していた中学校に統合、懸案だった在宅の要支援者への食糧支援を開始した。社協、民生委員の情報と日常接しているボランティアの情報をつき合わせ、万全を期した。

食糧支援は初日(16日)が21人で、21日の週は平均50人を超える状況。18日に水道が復旧、25日には中学校の避難所閉鎖を決定、学校側に引き渡した。支援活動を継続するために泉消防署加茂出張所だった建物へ食糧、機材を搬送。以降、同所を拠点にして、ガス復旧の翌日、4月2日まで、延べ633人に対し支援を行った。

## ■全ての活動にボランティアが貢献

指定避難所、自主避難所の集会所の運営、高齢者支援など全ての活動にボランティアの支援があった。ボランティアの人数が豊富なのが自慢である。社協ボランティアだけでも数十人がおり、更に町内会独自に登録者を抱える。特に防災ボランティアは経験豊富で、避難所運営に関して適宜適切なアドバイスを進言し会長を補佐した。



▲避難所の様子

連合町内会では毎年、社協を始め各団体、各ボランティアグループと定期的に交流の場を設け、親交を深めてきた。避難所運営は連合町内会の拡大役員会議という形で行ったが、ここにはボランティアスタッフも参加、積極的に運営に関わってもらった。

## 帰宅困難者ら数千人が殺到！

黒松北斗町内会 会長 佐藤 斌夫さん  
黒松いずみ会 会長 阪野 雅之さん

黒松団地は昭和34年に造成が始まった旧泉市最初の団地で、県営・公団・公社などの集合住宅が多く、それぞれ自治会を結成している。連合町内会は昭和39年発足で、現在は6町内会で構成されている。

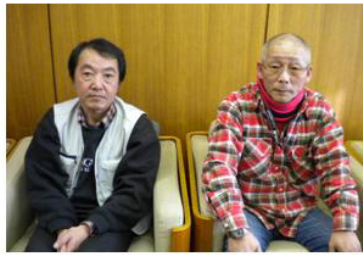
地下鉄沿線に位置しており、黒松駅・八乙女駅が近い。

### ■予想外の避難者数

地震発生後、佐藤・阪野両会長は、それぞれ地域の安否確認・被害確認後に、指定避難所である黒松小学校に参集した。その時点で、既に黒松北斗町内会・黒松いずみ会では集会所でも避難所開設の準備が進められていた。

夕方5時から6時になる頃、小学校には数千人の避難者が押しかけていた。連合町内会では毎年防災訓練を行ってきたが、この人数は全く予想してないものだった。

この日、避難所に宿泊したのはおよそ2千人、その3分の2は帰宅困難者だった。地下鉄黒松



▲左から、阪野雅之さん、佐藤斌夫さん

駅からの避難者が多かったようだ。小学校に着いた両会長は、学校側は児童に専念してもらおうこととし、避難所の立ち上げから地域が中心となり運営を行なった。

あまりの人数のため、配給できた食糧はわずかにビスケット3枚と500mlのペットボトルの水のみ。通路も取れない状況のためストーブも出せなかった。ただ、避難所開設前に集まった住民に対して、暗くなる前に一旦戻って防寒対策をしてから来るよう声がけした事もあって、何とか毛布は確保することが出来た。

### ■避難所間で物資を融通

避難所運営は、両会長のほか八乙女地区を含む町内会、PTA、子ども会育成会など、集まることの出来た人たちが行なった。

夜10時から朝5時の間は、地域の有志と協力して、2時間交替で避難所周辺の見回りを実施した。

生活用水にはプールの水を使用、13日には新潟市から給水のタンクが届き、小学校が給水所となった。給水に担当者をつける余裕はなかったが、時々見回って声がけすることもあった。

また、13日頃からは物資が届き始めた事から、各避難所の運営者を集めて、集会所も含めた避難所間の物資融通などを話し合う会合を持った。食糧の配給に関しては、次はいつになるか分からないという事を最初から周知していたので、不満は出なかった。

この打ち合わせは避難所閉鎖の時も役立った。

様々な状況から、避難所を18日に閉鎖することを16日に決定、市民センター、八乙女小・中学校も同時に閉鎖することとし、16日中に避難者に告知した。17日時点の黒松小学校の避難者は約100人だったが、事前の告知によってスムーズに閉鎖することが出来た。

なお、第2住宅集会所は23日、第3住宅は31日まで避難所を開設した。



▲黒松小学校体育館



▲集会所での炊き出し

### ■新たな取り組みを試行

今回は予想していなかった避難者数のために、訓練時の体制はできず、マニュアルも役に立たなかった。それでも、「形通りに行かなくても最低限のことが出来れば、あとは臨機応変に対応するしかない」として、「今までの防災訓練が全く役に立たなかったとは思わない」と、防災部長も長く務める阪野会長は話している。

震災後には、炊き出し訓練を兼ねた芋煮会の際に安否確認の練習を兼ねたり、防災訓練では避難所が満杯になった場合を考えて、黒松小学校を拠点として地域全体に物資を配給する形を試している。

## 地域の人材とネットワークで

### 避難所運営

向陽台連合町内会	会長	佐藤 一雄さん
向陽台四丁目町内会	会長	橋本 巖さん
向陽台五丁目町内会	会長	緑川 武夫さん
向陽台五丁目町内会	副会長	佐藤 貢さん



向陽台団地は、泉区の北部、国道4号線バイパス北側の丘陵地に位置する住宅地で、昭和40年代に開発が始まった。5つの町内会で連合町内会を構成しており、中世に起源を持つ古刹・洞雲寺が近い。

▶ 左から、佐藤一雄さん、佐藤貢さん、緑川武夫さん、橋本巖さん

### ■二ヶ所の避難所を運営

避難所となった向陽台小学校では、避難者が集まったため、教職員、連合町内会役員、居合わせた消防団員、それに地元の市議会議員が避難所開設に動いた。初日の避難者は約650人だった。

一方、向陽台コミュニティ・センターにも避難者が集まり、小学校も一杯だったため、センター管理者でもあった佐藤副会長らの判断で

避難所とすることとした。

こちらは初日に約1200人の避難者があり、小学校とともに夜10時過ぎに何とか夕食を提供することが出来た。

2日目の午後、小学校に連合町内会による本部を設置、一〜三丁目小学校、四、五丁目はコミュニティ・センターと分担を決めた。

3日目には電気が復旧し始めたため、4日目には避難所を小学校に統合した。小学校は17日に避難所を閉鎖している。



▲向陽台小学校体育館



▲コミュニティ・センターの様子

### ■食券による食事提供

食糧は2つの避難所で分け合っていたが、備蓄は初日で無くなり、支援物資が届くまでは商店・企業からの支援、住民の持ち寄りでのいいだ。その為、避難所への避難者以外に食糧を配ることは出来ず、やむなく避難者のみに食券を引換券として配布して対応した。

また、コミュニティ・センターでは、発電機の燃料が不足したため、配線を工夫して照明を暗くすることで対応した。

プールの水の汲み出しには、地域の方を通じて借りた水中ポンプが役立った。また、仮設トイレの汲み取りは、他県からの応援車両が頻繁に来てくれて助かった。

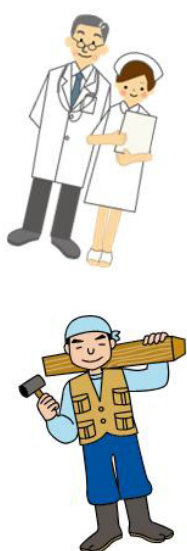
### ■地域のプロが避難所を支援

向陽台の各町内会にはそれぞれ防災倉庫があり、発電機、当面の燃料などは備蓄されていたが、自主防災組織の発足は震災発生前の3年前で、連合町内会としての防災訓練はまだ2回しか行っておらず、組織的な活動は不十分だった。そんな中で地域との連携が大きな力となった。

燃料店による炊き出し用のプロパンガスの設置や暖房用の灯油の提供、開業医による避難所への往診や、地域在住の看護師の泊り込みによる見回り、整体師によるマッサージなど、医療ボランティアが避難所に安心を与えた。

また、中学生が協力し、炊き出しや清掃、プールの水汲み等に活躍した。

緑川会長の「商店などとの連携はもちろんですが、地域には設備屋さんや建築屋さんなど、様々なプロが住んでいるのですから、いざという時にそういうプロの人たちの力が活かせる関係づくりやネットワークが必要だ」との言葉が印象に残る。



## 加美町の営農組合との 広域災害支援協定が生きた

松陵・永和台百合が丘連合町内会  
会長 宗片 隆文さん

松陵・永和台・百合が丘地区は泉区の北東部に位置し、泉の森に通じる緑豊かな住宅地である。昭和58年から開発された松陵ニュータウンを中心に6つの町内会により連合町内会が構成されている。近くには東北学院大学泉キャンパスと仙台白百合女子大学がある。

### ■4ヶ所の避難所開設に奔走

地震後すぐに松陵三丁目集会所へ。

想定していた役員は集まらず、副会長と役員の二人だけ。まずは町内の要介護者6人の安否確認を行い隣家に見守りを依頼する。

コミュニティ・センターに行くに既に避難者が50人程も集まっていたため開放。受付の女性を責任者に指名し3人に運営を任せることに。松陵小学校に行ったが50人程度だったので学校側に運営を依頼し中学校へ向かう。中学校では避難者の中にやる気のある男性がいたので運営委員長を依頼、最後に松陵西小学校へ行く。



▲宗片隆文さん

避難者が続々と集まって来たため、4時過ぎに運営委員会を設置、市議会議員が事務局長、会長が委員長となる。西小を中心に一日2回、小学校・中学校と連絡調整することとした。なお、避難所は18日に畳のある中学校の武道館に集約した。

### ■継続することで自然に体が覚える

運営委員会のメンバーは教頭先生、ボランティアを含め総勢40名で構成。5班を編成し役割分担を決め、責任者にはそれぞれ二、三人の実働部隊をつけた。委員会は朝5時、10時、夕方5時、夜10時の4回開催することとし、当日の夜には1200食の炊き出しをして避難者と在宅避難者へ提供した。

防災マニュアルと日頃の訓練の成果としては①継続する事で自然に体が覚えるということ、他に②運営委員会を速やかに設置できた事③役割分担と実行部隊を編成できた事④仮設トイレ五基を速やかに設置できた事⑤避難所が情報の発信源となった事等が挙げられる。

想定外だったのは地域外からの避難者も多かったということ、夜には800人弱にもなり、足の踏み場も無い状況であった。



▲初日は2階部分の通路まで人で埋まった避難所

### ■“加美”のご加護に感謝

支援はお寿司屋さんからスーパー、住民と色々あったが、特に心強かったのは加美町の上区城内営農組合の支援であった。学校の備蓄米をかき集め、地域外の中学校からも譲り受けたが12日の昼までしかない。昼の炊き出しの準備をしながら「夜の分はどうしよう」と、相談していたところに、米180キロと野菜を満載したトラックが到着。宮城県加美町の支援部隊である。避難者と住民は大喝采で彼らを迎えた。水々の要望を受けた部隊は、とって帰り夕方には自前の給水車で駆けつけるといふ離れ業をみせた。この支援は14日まで計6回にわたって行われたが、これは平成14年から続いた様々な地域ぐるみの交流の結果、前年に締結した災害支援協定が結実したものである。

《加美町からの支援の様子》



▶米と野菜を満載した支援物資の搬入



▶自前の給水車

## 共助が当たり前になる

### 地域社会を目指して

高森東連合町内会 会長 傳野 貞雄さん  
北高森町内会 会長 安司 定夫さん

高森東は泉区北部の泉パークタウンに昭和60年代に開発された住宅地で、地区内に高森東小・中学校、高森市民センターがある。連合町内会は5町内会で構成されている。

### ■設立した避難所運営ゲーム

地震発生時、傳野会長は高森東小学校で会議中だった。自分の町内の安否確認をした後、小学校で食糧・毛布など物資の準備、暖房・燃料の調達、プールの水の汲み出しなどを行なって避難所の体制を整えたが、毎年高森東小学校で行なっている防災訓練と連合町内会の自主防災組織をそのまま活かして、連合町内会が中心となって運営を行なうこととした。避難所開設訓練は行なっていなかったが、前年に避難所運営ゲームを体験しており、これが大変役に立った。小学校の初日の避難者は140〜150人で、婦人防火クラブが学校備蓄のアルファ米で炊き出しを行なった。

体育館は寒かったので、床に体育マットを敷き、足りないところはダンボールを広げ、ストーブは燃費の良い小型のものを集めて、高齢者はストーブの近くに集まってもらった。

高森東小学校の避難所は、電気の復旧に合わせ、13日に閉鎖した。

なお、地域では高森中学校にも避難者が集まり、学校の教職員が中心となって16日まで避難所を開設した。



▲左から、安司定夫さん、傳野貞雄さん。集会所備品の車椅子と大型の消火器。

### ■班長を福祉委員に

以前からの取り組みが役立った例としては、防災訓練の他、町内会ごとに作っている災害時要支援者名簿や、班長を「福祉委員」に委嘱し、安否確認を行なう体制があげられる。

また、泉パークタウン自治会連絡協議会で作成された防災マップが全戸配布されていた。各町内会で持っていたプロパンガスや大金、災害応急用井戸も役立った。

生活用水に関しては、小学校のプールの水を使っていたが、減り方が激しかったため、翌日には使用を禁止した。普段から風呂の水を捨てないよう声がけしていたので何とかだったので、と会長は考えている。

### ■地域の助け合いで乗り切る

地域では、早い所で翌日には電気が復旧したが、一部だけ電気が点いている状態だった。

そこで近所が協力し、電気が復旧していない家庭のために庭にコンセントを出して、炊飯器や携帯電話の充電に使ってもらうこととした。

地域においては、普段から各町内会と社協ボランティアによるサロン活動が盛んで、高齢者の安否確認の手段ともなっている。こういった地域の日常的なコミュニケーションが防災活動には欠かせない。

震災後、連合町内会では防災アンケートを行なうとともに、災害用マンホールトイレ等、防災備品の拡充を行なっている。

今後については、中学校との連携も考えて行きたいと考えている。

また、共助が当たり前、エチケットになるような地域社会になれば良いと願っている。



▲安否確認用の旗と、ヘッドランプ・ランタン等の役員の装備。下の箱は新たに購入した災害用マンホールトイレ。



## 6月に大反省会を実施

長命ヶ丘連合町内会 会長 永山 三男さん

長命ヶ丘は、仙台北環状線沿いの丘陵地に昭和50年台に開発された住宅地で、団地内の9町内会が長命ヶ丘連合町内会を構成している。団地内には長命ヶ丘小学校・中学校の他に泉館山高校、市民センターなどがあり、愛の鐘通りが商店街の中心になっている。

### ■震災当日に本部立ち上げ

地震発生時、永山会長は一番町にいたが、学校の教職員、連合町内会役員、地域ボランティアによって長命ヶ丘小学校の避難所を立ち上げ、その日の夜には本部による避難所の運営体制を整えた。当日避難所に泊まったのは約100人だった。

ここで大きな力となったのは、日頃防災活動の盛んな町内会の人々と、阪神大震災で避難所運営を経験した青年等5名の町内から集まったボランティアの的確な指示・行動であった。



▲避難所内の様子



▲永山三男さん

### ■ボランティアの受付窓口を設置

避難所の運営でも地域の人の協力があつた。ボランティア受付窓口を作ったところ、中・高生を含む多くの参加があり、先の5人とともに運営を助けた。また、看護師資格のある住民が高齢避難者や体調不良者のケアを行なった。近隣商店からは食糧・物資の支援があり、商店会は物資・燃料の調達に貢献した。

震災当日の炊き出しはおやじの会が準備、その後は単位町内会が交替で担当した。お祭りや芋煮会など普段の町内会活動が力になった。

一方、給水車による給水場所についての情報が錯綜して2ヶ所に分散して人が並び混乱した場面では、一ヶ所に集め、二列に並び交互に給水してもらうことで何とか収拾することが出来た。

3日目にはアルファ米も乏しくなり、米の調達を商店会で用意し、水の調達では、地域住民からトラックに積載できる水用タンクの提供があったことから、会長と商店会メンバーが泉ヶ岳へ炊き出し用の沢水を汲みに行った。

町内の避難所は小学校・中学校の2ヶ所であるが、長年に及ぶ訓練等は小学校のみで実施していたために、中学校への避難者はわずかであった。このため避難者は全て小学校へ集約させた。本部と各担当の役割分担もうまく行き、避難所運営は上出来だったと考えている。

なお、避難所は、電気の復旧や燃料等の状況をふまえて4日目に閉鎖した。

### ■朝夕2回のミーティングが重要

避難所では、名簿作成と町内会ごとの場所割りをするために、一度場所取りした避難者に移動してもらい配置し直している。ちょうど前年に防災訓練でやっていたことだが、これによって、毎日、引継ぎを含めて、7時と16時に行なったミーティングの結果を、単位町内会長が各町内会の避難者へ直接伝える形が出来た。

6月には大反省会を実施、避難所運営委員会組織の見直しを行なったが、今後も単位町内会の防災機能の向上が重要と考えており、単位町内会ごとの役割分担を行って、さらに過酷な状況でも対応出来るような防災組織を検討している。



▲炊き出しの様子



▶給水の列

## 小学校が被災！

### コミュニティ・センターを避難所に

南光台第六町内会 会長 大内 行男さん



南光台第六町内会は南光台地区連合町内会に属し、指定避難所の南光台小学校はじめ市民センター、コミュニティ・センターなど公共施設が集中している地域にある。急速に進む高齢化に頭を悩ませる大内さんは会長歴20年という大ベテランである。

### 水を求めて長蛇の列

地震後、会長は指定避難所の南光台小学校に行くが被災し体育館は使用不可。ただ地下に100トンの貯水タンクがあり給水はできる。またプールの水は生活用水になる。

更に小学校は泉区における最初の給水場所3ヶ所のうちのひとつとなった。マスコミによる報道もあり、またたく間に2000人以上が列をなした。会長は給水支援に6人の役員を投入し、誘導や給水補助、交通整理に当たらせる。

それにしても校庭を3周以上も並ぶ長蛇の列、学校周囲の路上には歩行に支障をきたすほ

どの車両の列ができた。

夜8時になっても1000人以上も並んでいる。寒風の中、何時間も待つ住民、情報が錯綜し次回の給水時間を周知できない役員、役員の黄色のユニフォームに飛ぶ怒号、詰め寄る者もいた。プールの水汲みが一段落したのが深夜。他の町内からも応援を貰ったが役員の苦難は連日続くことになる。3日間は持つといわれた貯水タンクも翌日には空になるほどで、プールの水も数日でほぼ無くなった。



▲地下の貯水タンクから給水  
＜写真提供 若杉威氏＞

### 一日、1000杯の水汲み

市民センターも被災で使用できず、急ぎよ避難所となったコミュニティ・センターの運営は同センターの管理者でもある会長と役員3人があった。

食糧がないので極力、南光台中学校へ誘導したが、それでも避難者は120人に達した。ストーブは市民センターから借りた1台のみで、翌日明るくなってから防災資機材倉庫から毛布

やストーブを運び出した。食糧は地域の事業者などからの差し入れと小学校から移した1000食のアルファ米のみ。炊き出しには、班長経験者が駆けつけ避難所の有志とともにあたった。ここでも困ったのが水。なにしろトイレが度々詰まる。そこで役員はビニール袋を準備、紙を流すのを禁止した。トイレ利用者は避難者のみならず、自宅のトイレが使用できない周辺住民も来る。そのため、隣接する小学校のプールから数十個のバケツに水を汲み、リヤカーで運搬。その数一日、1000杯。水との格闘はここでも続いた。

### 決め手は隣近所の助け合い

町内の役員が小学校の給水やコミュニティ・センターの避難所運営に係わったため、自分の町内の安否確認や在宅避難者への食糧支援などは、ほとんどできなかったが、隣近所が助け合っていた。

いざという時に助け合える関係、これが本当のご近所付き合いの姿ではないかと会長は考えている。



▲近所の要望も聞いて買出しに  
＜写真提供 若杉威氏＞

## 小規模だからこそできた

### 見回り・小まわり・気配りが

友愛町自治会 会長 田村 蒸治さん

友愛町自治会は泉中央地区の東側、一戸建てと集合住宅の混在する、東を要害川、南と西を七北田川、北を泉ヶ岳通りに面する商店に囲まれた小さな住宅街である。188世帯の小規模な自治会で、指定避難所は市名坂小学校である。

## ■小学校・集会所の避難所開設に奔走

七北田コミュニティ・センターで会議中に激震。自宅を確認後、町内の安否確認にまわる。集会所に行き、中を片付けた頃から避難者が集まり始めたため開放し、様子を見に小学校へ。雪が降る中、児童は校庭に避難中だったが、教頭先生と一緒に体育館の安全を確保して、児童を中に避難させる。一般の避難者が集まって来たので、落ち着く場所を区切って誘導を手伝う。

集会所に戻ったところ、避難者は12世帯30人程度で、ほとんどが子ども連れの若い女性。集会所は8畳二間と狭く、足も伸ばせない厳しい状況。避難をあきらめて帰るお年寄も多かった。運営は基本的に避難者の自主運営とし、15日まで開放した。



▲田村蒸治さん

## ■自治会回覧により人命救助

情報の必要性を感じ、

臨時の「自治会ニュース」を発行。町内を一軒

ずつ聞き取りしたところ、難病の方から、呼吸

器用のポンプが停電のため手動では大変、との訴

えがあったことから、車の電源を利用するため

ガソリンの提供を呼びかける。ほどなく携行缶で提供があり、事無きを得た。救急車の要請も

ままならぬ中、大きな救いとなった。

自治会ニュースは地震当日から発行。ライフ

ラインの復旧見通しや給水情報、スーパーマーケットやガソリンスタンドの開店情報など会長

に寄せられた生活情報を速やかに配信した。当初は手書きで、電気復旧後はパソコンで作成した。また留守宅があって回覧が滞ると聞いたこ

とから、班長の協力を得て、全戸配付に切り替えた。



▲自治会ニュース

## ■お祭りサポーターが屋根にシート掛け

「お祭りサポーター」は通常、お祭りの会場設営を担う町内のグループだが、電気や建築等多くの技術者が加わる集団である。民生委員などの依頼に応じて、サポーター有志が屋根瓦が崩れた数軒の屋根をブルーシートで覆い、風雨をしのげる状態に修復・応急処置する等活躍した。

断水の間、七北田川からポンプと発電機で水を汲み上げ、大型と中型のタンクに溜めて生活用水として提供。他地区の住民にも利用された。

大型タンクと揚水ポンプなどは町内の方が勤める会社から借用。中型タンクは花壇の散水用として備えてあったものを使用。両方の利用で、一日1回の揚水で間に合った。

また、高齢者だけのお宅には、「タンス起こし」や家具の位置の復旧などの手伝いをした。社協の友愛支部の方々も活躍した。

## ■ガス・水道復旧隊に集会所を開放

ガス、水道の復旧工事には札幌や大阪の復旧隊が来て、トイレもままならない過酷な環境の中で活動していたことから、集会所を休憩所として利用してもらうようにした。

有志が豚汁などを提供し大変喜ばれた。暖かい心配りができたと思う。また、17日からはデザイナーズの間として集会所を提供、高齢者支援の一助となった。



▶友愛町集会所と天水桶



▶100mのホースで揚水した七北田川

▶ 予想をはるかに超える避難者  
(黒松小学校体育館)



◀ 学生ボランティアの活躍  
(館中学校)



▶ 給水を待つ長い列  
(南光台ふれあい広場)  
<写真提供 若杉威氏>

発行 仙台市泉区まちづくり推進課

仙台市泉区泉中央二丁目1番地の1

電話 022-372-3111 (代表)